

Mayim Press

雄さんの思い出

思い出の雄さん



佐々木史朗

ゲスト・プロデューサー／東京都

私と雄さん

いつもフラリと事務所のドアをくぐって「あ、こんちわ」と声をかけてきたよね。

根岸吉太郎の『遠雷』が最初だったかな。あれから何度か招待いただいたか。すてきな部屋だったのに相米慎二に囲碁で粘られて温泉にも入らず、散歩もしないで半日近く畳の部屋に座りこんでいたことがあったよなあ。

二時間くらい雑談と誰か監督についての噂ばなしで「じゃまた」と言って出ていったよな。

あの「ふらり」がなくなると、心の中のちいさな穴がポツンとあいたみたいでさびしいな。

安部 隆

映画祭ポスターデザイン／由布市

雄さんと私

1976年から新聞社で46年、映画祭で46年お世話さまになりました。

伊藤さん、まだまだ一緒に生きて行きましよう。

堀田 秀雄

参加者・元実行委員／福岡県

【追悼】伊藤雄さん

1月14日金曜昼「徹子の部屋」見ていたら次回ゲスト藤竜也さん。伊藤雄さん、雄さんは藤竜也さんとも親しいから、いつもの様にメールで、明日の徹子の部屋は藤竜也さんですと知らせた。送った後から土日無いら月曜ゲストと分かったけど、そんな事気にしない心広い人だから気にしない事に「13日の夜宿に戻る部屋までの途中心臓発作で亡くなっていた」

14日夜6時、雄さんが亡くなったらしいです。ねって倉敷の岡本さんからラインが届く。まさか落ち着けと自分に言い聞かせ大分映像センターに電話する。普段であれば平日の、この時間は誰も居ないから繋がらない。だが鹿子島君が出た。まだ何も分からない状態と云う。家族が現場に向かっていると云う。憶測では話さない鹿子島君だから、そこで電話を切った。取り敢えず岡本さんに報告したら、もう少し詳しい状況を教えてくれた。頭が真っ白になる。いろんな事を想像する。その夜は眠る事が出来なかった。

○伊藤雄さんの思い出、20回95年ゲストの映画関係で、次回作の前売り券頼まれ1万円代金を送った。音沙汰なし。返金無しだった。雄さん騙されたんだろうか。翌年だったか別の映画券が送って来た。わだかまり解けて、映画祭会場に行くことやと素直に言える様になった。インタビューを受けているのを目で挨拶してくれる。嬉しかったなあ。

○セブンイレブン経営で鬱の時、大分映像セン

ターで清順特集が有り最後にトーク会があるから思い切つて午後遅くから福岡を出てトーク会だけ参加で行くが、参加者が4人だったからトーク無し解散だった。雄さんは、自宅に電話して友人が来たから帰りは遅くなると伝えてくれた。恐らく食事用意されていたんだろう。文句や、おこがましい事一切言わない人だ。居酒屋で楽しく話して呑んだ。この人を裏切る事はししないと誓った。

○店に夜、雄さんから福岡中洲の屋台で呑んでいるからおいでの電話が来た。スタッフに任せて急遽向かう。90分程待たせる結果に。28回03年映画祭ゲストに東映会長岡田茂決定が余程嬉しかったみたいだ。呑んだ呑んだで雄さん日帰りの積もりで宿予約無し、地下鉄も終電過ぎで、2人タクシーで帰宅。雄さんは僕の布団で、僕はマッサージエアで寝た。70歳同い年だから52歳の頃か。酔つた雄さん、悪いなあ一緒に寝ようと言われた。翌朝、一度仕事に出て戻ったけどまだ寝ていた。全く動く事なく眠る姿に驚く。堀田さんには一宿一飯の恩義あるからなあと言う人だった。

○編集の富田功さんが末期癌病中、大分で呑んだ時、富田さん良い人だったなあと言ったら、血相変えて「いい人だったじゃない。いい人なんだ！」と怒られた。怒られて嬉しかった。ネットの堀田秀雄にはその文章が未だ残ってる。

○荒井晴彦さんが来大分。荒井トークの後、みんなで街で呑む。散々呑んで全ての飲み屋閉店。宿に帰るつもりでいた僕、荒井さんと呑み足りない雄さん。電気消えてドアがほんのチヨット開いている店を発見した雄さんは、ツカツカと入る。店も雄さんならば仕方ない。4人で座敷に。途中から寝た隣人。僕もタヌキ寝入り。荒井さんと2人で若松組赤バス時代の話をしてた。

○32回07年だったと思う年は記憶定かたなく曖昧です。雄さんが委員長長退任発表。映画人と親身な付き合いからか、映画祭の赤字が膨ら

んだ。それまで販売手伝いしていたが、雄さんの勇退の為もあり祭スタッフに成った。赤字の為に、1人5万円出す事になる。雄さんに「パンフ800円から1000円にしようと言う。俺にそんな力ないんよ」と雄さん。映画祭会議で毎週大分に行くから、毎回雄さんと呑んだ。僕みたいな人でも別け隔てなく対等に話をしてくれる人だった。脚本家笠原和夫って凄い人だったんだねと云うと。俺も知らなかったんだと言ってくれる雄さん。俺の知らない雄さんの知らない知識程度が違うのに嬉しくさせてくれる。そんな人柄だった。

○映画祭準備会議が終わり大分駅近くの、雄さんの高専の後輩がやってくる「青年酒場」に雄さんと2人で行く。雄さんの深刻な様子に女将が理由を聴いて来た。僕が訳を話す(雄さんはほしくない人)。だったら高専OBにカンパ頼もうとなる。無理強いが嫌いな雄さん嫌がる。ドンドン話進めてもらう。1回限りだからと雄さん。福岡博多座で藤山直美公演があるから頼もうか？ 行けば否応なしに出すだろうからソレはダメなんだよと僕に優しく諭してくれる雄さん。思い出は尽きない。

○委員長辞めても映画祭では沢山の友人知人映画人と対応だから、ゆつくり話す時間が無かった。僕なんて末席の友人。みんなの雄さんなんだ。昨年発売の雄さんの「観るか呑むか湯布院映画祭酔狂譚」、是非湯布院映画祭の歴史を読んで下さい。本は伊藤雄さんの自伝でも有ります。フェイスブックで数十人に直接本案内した。メカオンチの僕には、きつい事だったけど雄さんから感謝されたから良かった。昨年の映画祭で、お道



↑第16回(1991年)左から、雄さん、鈴木則文監督、一人とばして、澤井信一郎監督、笠原和夫さん

化てホッタさん高額の支援金ありがところが最後
に交わした雄さんとの会話だった。コロナになる
直前の晩秋、雄さんと2人で福岡中州で呑む。ふ
ざけてハグすると痩せていた。健康の為にダイエツ
トした雄さんだったのに。



↑第16回(1991年)マキノ雅広監督(中央前)、鈴木則文監督(右)と雄さん(左)

鈴木 義弘

参加者／大分市

ワンシーン'84夏(回想「ゴジラ対雄さん」)

「ゴジ」さんはこの夜も荒れていた。1984年8月
26日(日)、第9回湯布院映画祭最終日のパー
ティ亀の井別荘湯の岳庵(深夜の一幕である。
前日と当日それぞれ特別試写された『麻雀放浪
記』(和田誠監督と、特に『お葬式』伊丹十三監
督)が大絶賛されているなかでもあり、やはりこ
の日に上映された『紅の流れ星』(舛田利雄監督、
1967年)を絶賛しつつ、この作品が話題にあ
がっていなかった参加者の反応にも不満があつた

ようだった。映画祭実行委員会の運営姿勢に(多
分に誤解を含みつつ)疑問を感じていたらしいと
も後で耳にしたが、真意は定かではない。とにかく、
相変わらずの泥酔、参加者の胸元にぐい呑み
を投げつけて自説を述べながら、そのうち、「実
行委員長を殴らせろ!」「伊藤を呼べ!」を繰り返
し始めていた。何しろ「ゴジ」さんは、屈強の体軀
をアメフトで鍛えていた人なのである。間もなく
してこれを聞きつけた雄さんが現れた。ひとこと
「それで済むなら、オレを殴れ!」という主旨
のコトバだったと記憶する。しっかりと相手の目
を見据えていたか? 覚悟して目を瞑っていた
か?(多分前者であつた。雄さんに詰めよる「ゴジ
」さんの右手が拳をにぎり、そして振りかざそうと
する。血を見るか。しかし、しかし、間一髪、彼の
アクションが静止した。「カット!」の音がかり、
カチンコの音が響いた(ように)。事態が回避され
たのは、腹の座つた実行委員長を受け容れてくれ
たのかも知れない。いうまでも
なく『青春の殺
人者』も『太陽
を盗んだ男』も、それに『逆
噴射家族』も素
晴らしい。永年
通っているなか
でのワンシー
ン、対立や葛
藤、感動や友好
を重ねながら、
愛する湯布院
映画祭は半世
紀つづいている。



(2011年7月8日「青年酒場」にて)撮影:鈴木
内輪で開いた還暦のお祝い

*写真提供 鈴木義弘さん

田中正信

参加者／山口県

私だけが知っている雄さん

伊藤雄さんを見たのは、1980年の湯布院映
画祭第5回に初参加の時だ。湯布院映画祭の自
分の認識は、中谷健太郎、白井佳夫、伊藤雄の三
名の方達(敬称略でいきます)の、努力で出来上
がったものだということだが異存はないでしょ
う。俺はどうなのだという人、ごめんなさい。物
事を進めるには、ほっとになるひとがいなければ
ならない。ほっとになるといふのは、山口県の方
言と思つていたが、英語のホットが当てはまるな
と方言ではなかったのだと大発見。

雄さんはホットな人だった。それは「観るか呑
むか」を読めばよくわかる。湯布院映画祭の最大
の魅力は映画人と話しが出来ることだ。森下愛
子、松坂慶子、石田えり! うおっ女優さんに
会える。藤田美保子に会いたい。TVの人だから
ダメか。中島ゆたかだ。この人は映画女優だ。
『従軍慰安婦』もある。『トラック野郎』第一作の
マドンナだ。誰にお願ひすればいいのだ。そりや実
行委員長だろ。第6回のパーティーの時には酒
の勢いを借りて「中島ゆたか呼んで下さい。」を
連呼していた。ただそれだけ。シンポジウムで
しゃべったこともない。パーティーになると何処か
らかやってきて「中島ゆたか呼んで下さい。」とい
うだけ。返事を聞いた覚えはないので、またこい
つかと軽く流されていたのだらう。

1986年第11回。まだ言つた。「中島ゆたか
を呼んで下さい。」。このころには田中の名前も覚

えられただろう。翌年から田中は来なかった。2013年、田中は古湯映画祭にいた。ええー。まだ湯布院映画祭やってんの？もうすぐ40回だという。そりゃ、40回記念に行っちゃは礼だと39回から再参加した。さすがに実行委員長は三宮さんになっちゃった。顧問の雄さんに言った方がよからうと、雄さんをつかまえて「中島ゆたかを呼んで下さい。」と復帰のご挨拶。こいつまだ生きていたのかと思われただろう。お互い様よ。

この39回には安藤サクラが来ていた。それでも、「中島ゆたかを呼んで下さい。」を言いつづけた。ある年、言われた。「俺も中島ゆたかは好きなんだよ。」そうか、顧問をやっても、自分の好きにはできないという苦渋に溢れていた。もう言っちゃいけないんだ。ぼくには、安藤サクラがいる。「安藤サクラ呼んでよ。」その年から安藤サクラは、作品がなくても来るようになった。そう仕向ける雄さんが好きだった。サクラちゃんの赤ちゃんの名前も教えてもらった。なんで過去形になるのだ。もう雄さんはいないのか。雄さんの魂は、みんなの心に生きている。



↑第38回(2013年)安藤サクラさん(中央)、柄本佑さん(右)と雄さん

小林 俊道

実行委員・編集者／長野県

新たな出会いを作ってくれた雄さん、

ありがとう

あまりに突然のことであんなに絶句するほどなかった。

電話で報せをもらった阪本順治監督と話をしながら「観るか 呑むか 湯布院映画祭酔狂譚」の本文の最終頁に掲載した別府ブルーバード劇場の岡本照さんと阪本監督の写真が脳裡に浮かんでいた。

雄さんが初めて著した「観るか 呑むか 湯布院映画祭酔狂譚」は、映画祭の当初の会期(二〇二一年八月二十六〜二十九日)に併せて刊行するべく同年三月から編集制作を進め、新しい映画祭会場とともに華々しくお披露目されるはずだった。しかし映画祭がコロナ禍で延期になってしまい、残念ながらそれは叶わなかった。

本自体はほぼ予定通り八月末にはできあがり、その日以来、雄さんより出来栄への周りの反応や、誰某から注文があったなどなどの報告が連日のように寄せられ、その喜びと興奮ぶりは遠く離れた信州小諸までつづさに伝わってきた。久しぶりに手がけた単行本の出来に立ち会えず、その喜びを分かち合えないのが悔しく、秋の映画祭まで待ちきれなくなつて飛行機に乗った。

十月十日、大分空港には湯布院から瀧野恵太、西原慎一郎の両君がわざわざ迎えにきてくれた。湯布院には映画祭の実行委員として二〇〇六年から毎年訪れていながら、映画祭の開期

中は会場と宿舎を往復するばかりで、当地の実行委員との交流は薄く、二〇一一年まで実行委員長だった雄さんとも特別試写作品の選定や配給元との交渉のために上京した折に酒席で雑談する程度の付き合いだった。車の中で「雄さんはもう湯布院入りして安部順一さん、佐藤宏信君と(八縁)で呑んでいますよ」と恵太君。店に着いたときには案の定もうできあがっていて、さあこれからと勇んで呑み始めた二次会は早々にお開きになってしまう。

翌日、雄さんと一緒に特設コーナーに本を並べてくれている駅前の(一休)の売れ行きを確認し、映画祭の新会場ゆふいんラックホールを案内してもらい、(菊すけ)で美味な山椒カレーうどんに舌鼓を打ってから庄屋で中谷健太郎さんとしばし飲談。その後、市役所で紹介された後藤睦文さんに勧められた温水園内の東勝吉のギャラリーで作品を鑑賞、(こと)に立ち寄って、雄さんは本の表紙の題字を書いた柄本明さん、裏表紙の書画を描いた奥田瑛二さんにジャムを贈る手配。そして、(バルジューン)にて約一カ月遅れの出版祝い。装幀を手がけた恵太君、出版を後押しした大谷隆広君と廣瀬風里さんという面子で雄さんを囲み、完成するまでのあれやこれや、映画祭の今後のことなどを酒肴に祝杯をあげる。カラオケで気分を変えつつも



みなさん、この本を飲んで「湯布院映画祭」にお出かけください。
ワシはともかく、ユウさんが盃を握ってお迎えするよ、
じゃから貴方も「マイ杯」を持って—— 伊藤 雄

りで席を移した(来夢来人)でも話は尽きず、宿に帰り着いたときには午前三時を回っていた。たった二日間ではあつたけれども、「観るか呑むか 湯布院映画祭酔狂譚」の著者が湯布院の地に四十数年にわたつて刻んだ生き様を垣間見るとともに、健太郎さんをはじめとする湯布院の老若男女に愛され、慕われていることに少なからず嫉妬を覚えながら帰途についた。

最後に、本作りを依頼されてから完成するまでの間に生まれたいくつもの新たな出会い、それは貴兄から私への無言の返礼だったのだ、そう思うことにします。

ありがとう、雄さん。

徳永 純二

臼杵市

私と雄さん

あなたとは、誰からも紹介されたことはありませんよ。

都町にあったスナック「のり」の、亡きママを偲ぶ会で、

ブリック・ブロックの、「憂歌団」のボーカル・木村充揮のライブで、

臼杵で、映画監督・曾根中生を囲んで、「青春酒場のカウンターで、

日豊本線下りの終電車で、

何度も隣同士となるうちに、「縁ができて、どちらともなく、話し友だち、飲み友だちになつたのは、いつだったでしょうか。

そんな、風のように出会った二人だから、

あなたが行ってしまったなんて、思えない。いつの間にか、隣でうまそうに飲んでいる雄さんがいると、信じています。

江森 孝則

参加者／長崎県

伊藤雄旅日記 長崎篇 添乗員1名

「根岸吉太郎監督の映画撮影に同行しませんか?」甘い誘いだつた。1982年晩秋、第7回映画祭が終わつた頃(約40年前)のお話。伊藤雄さん・31歳、当方・29歳。

セントラルアーツ製作・松竹配給『俺たちのウエディング』(時任三郎、宮崎美子、美保純他)当時は新進脚本家だつた丸山昇一のオリジナル脚本を気に入った監督が映画化。主人公の別れた彼女、出身地が長崎という設定で現地ロケーションを敢行。

当時は諫早という長崎市から車で1時間かかる土地に在住、ロケ現場には1日目木曜午後から車移動にて参加。待ち合わせ場所に現れた雄さんはスタッフに挨拶済みらしく、撮影現場(長崎市内、有名な一口餃子店)へ案内してくれた。実在の店舗を借用して無名俳優(女店員役)を配置するのはテレビ「孤独のグルメシリーズ」等々珍しくない。当時は映画ファンの初心者だつたので、興味津々。

他方、雄さんはスタッフの一員みたいに撮影を楽しむ。夕刻、滞在中のホテルにて室内場面を撮るスタッフへ、差し入れ：国産ウチスキー4本を手交、翌日早朝の来訪を期して、車で雄さんと共に

諫早へ戻る。添乗員兼ドライバーを担当した当方への心配りに感謝。

2日目金曜、約束通り早朝6時ホテル到着。同席させてもらった朝食の席で、雄さんの差し入れの件が披露、その場が一瞬にして和む。映画屋さんは何処も酒好きが多いらしい。

あの日の予定はタイトで、朝・長崎市内↓野母崎漁港↓午後・長崎市内↓長崎港と進行して、諫早へ車を飛ばして帰着は午前0時。野母崎町は市内から南東側に車で1時間くらいは鄙びて何処にでもある漁港、その一角にある干し魚の乾燥小屋(主人公は探す彼女(美保純)の肉親を訪ねる。素っ気なく対応する母親役・中島葵さんを離れた漁港脇のポイントから狙う前田米造キヤマラン・録音渡辺三男・美術今村力、そしてテストを繰り返す根岸吉太郎監督。スタッフと一体化した雄さん&当方も、レンズの彼方の芝居を凝視する。

小春日和の屋外に、「本番」の音が響き彼方の造船所作業員、助監督の指示で一瞬作業を止めたらう(シンクロナ同時録音撮影のため)。

昼過ぎ長崎市内へ取返して、長崎港周辺での主人公が飛び込む場面。潮位で変化する港の水深確認のため若手助監督が事前に飛び込み安全を確保していた。ずぶ濡れの若手は即座に隣の銭湯へ。ロケハンといわれる、事前調査の見事さにこの文章を作成しながら感心する。ロケ場所の選定、風景の切り取り方、地元人気質等々。深夜本番が終わり再び諫早へ。

3日目土曜、長崎市内の路面電車を1両借り切つての白昼幻像場面が本日のメインコース。「映画は撮影現場がすべて」と豪語されるセントラルアーツ代表取締役社長・黒澤満氏突然の来訪、ロケ現場慰問は一層華やいだ。JR長崎駅前の地元中華料理店へ、僕等も同行。名刺を頂戴する、はつきりとした口調と丁寧な言葉使いは好印象。雄さんは既に面識があり、

黒澤満セントラルアーツとの熱い交流が後の映

画祭ゲスト交渉の決め手(俳優松田優作氏の招聘等々の一助になったのだろう。撮影は白昼の長崎市内電車線路脇国道沿いに望遠カメラを設置して実施された。主人公の夢の場面：理由不明に主人公を路面電車が追いかけてくる。よく見ると乗客は黒服のシスター(聖女)集団!!!?地元サービスだったのか。

4日目日曜、午後には大分へ帰郷する雄さんを伴って、JR長崎駅の改札口へ向かう。そこには、本作品の登場人物(時任、美保、中島、そして宍戸錠)の姿が。時任と美保が出会う夜行寝台列車の場面撮影が控えていた。寝台特急を1両貸切(長崎→佐賀)っての大掛かりな山場だったが、雄さんはここまで。昼過ぎの特急で大分へ。残された映画好き添乗員は、撮影に同行し佐賀迄寝台車に。

…翌83年春、全国松竹邦画系2本立ての1本として公開された。観客・劇場どちらからも反応は無く、数年後根岸吉太郎監督、俳優時任三郎コンビは、長崎ロケで『永遠の1/2』を世に問う。今度は雄さんの力を借りること無く、地元協力者となった。それは、また別の話です。

今般の原稿を書くにあたり、資料整理した折、黒澤満さんの名刺と無名女優伊藤公子(いとうきみこ)さんからの達筆なお札葉書を見つけました。天国の伊藤雄さん、ありがとう。



↑ 第24回(1999年)変身、変身、また変身の回で女装した雄さん

遠藤 聡

参加者・元実行委員／大分市

私と雄さん

ところでよく考えてみると、本来なら私のような者は馴れ馴れしく「雄さん」などと呼ぶのではなく、きちんと「伊藤先生」とお呼びしなければならぬ立場だったのかも知れませんが、例えば湯布院の老舗旅館の社長さんから映画祭の若手実行委員に至るまで、誰かが雄さんのことを「雄さん」とい呼び方以外で呼んでいるのを聞いたことがなくて、これも雄さんの人柄かなあ、と思いつつ、そういえば今から五、六年前でしたか、私が夜、自転車街に出て、映画を見て帰る途中、府内五番街から出てきて遊歩公園の信号のところをいたら、前の方から見覚えのある人影がゆつくりとこちらの方に歩いて来ていて、それはいかにも一杯気分で楽しそうな雄さんだったんですが、私が「あ、雄さんこんばんは。遠藤です」と言ったら「え? おおー遠藤くんか。じゃー一軒行こうか」と誘われて、さすがに「あーいやいや……」とお断り



↑ 第26回(2001年)『少女』シンポジウム

したんですが、私なんかにも馴れ馴れしく接してくれて、にもかかわらず、私は映画祭の実行委員をやっているも何の貢献もできないばかりか、足を引っぱってばかりで、お詫びの言葉もありません。でも今は昔みたいにガンガンとバカ飲みませんでしたので、機会があったらまた誘って下さい。まあたまには帰って来て下さいよ。でも、とりあえず、お休みなさい。お疲れ様でした。

渡辺 葉子

参加者・映画祭パンフレット執筆者／東京都

伊藤雄さんに言いたかったこと

昨年の映画祭でお別れした時の雄さんのお顔が忘れられません。あの時、雄さんは私が「映画芸術」に書いた雄さんの著書「観るか 呑むか 湯布院映画祭酔狂譚」の書評に対して、ひとこと言いたかった様子でした。私もあの時、自分が書いた「あまりにも男たちのドキュメント」になっていたという苦言はいささか勇み足だったのでないかと思いついていたんです。「観るか 呑むか」は雄さんが自分の映画人生と湯布院映画祭の歴史を軽妙に綴った著書であり、雄さんならではの男気のある映画人との交友録がその中心でした。映画祭の成り立ちの方に焦点を当てた私の書評に対して、息子の哲也は「湯布院映画祭は官や民の力を頼らずに作り上げてきた手作りの映画祭、それを紡いできた雄さんに触れるべきだったでしょ」とコメントしてきました。雄さん、私の言葉が足りませんでした。一言弁明させていただければ、「お祭りでもいいも楽しそうにしているのは男

ただけれど、女たちだっただけで楽しんでるんだよ、何より私がそうだから」と言いたかったんです。

約40年前に初めてお会いした時の雄さんは長身瘦躯の美青年で、こんなに若い人が映画祭を主宰しているんだと感心し、その後バスター・キートンへの偏愛をお聞きした時には、並の映画ファンではないと畏れ、気安く映画の感想を言ったりしては大変と身構えたものでした。お互いの映画の嗜好を深く語り合ったことはありませんでしたが、年賀状で雄さんのその年のベストテンを知るのを楽しみで、その硬軟入り混じった選択の中に、『バグダッド・カフェ』や『生きてるうちが花なのよ 死んだらそれまで』や『党宣言』があったり、『フォロー・ミー』が生涯ベストテンに入っていたのを嬉しく覚えていました。

映画芸術・編集部は私が書いた書評に「雄さんの『好き』がみんなの『好き』に繋がる」という素敵なタイトルを付けてくれました。みんながそれぞれ抱えていた「映画の好き」を、持ち寄って交換し合うのが映画祭です。それがどんなに幸せなことだったか、そしてそれぞれの人生に如何にフィードバックしていったことが、これを語り出したら止まらなくなりそうです。ともかく、どんな運命の導きがあったにせよ、雄さんの「好き」に繋がる事ができて良かった、この奇跡と軌跡に感謝しています。



↑ 第39回(2014年)シンポジウムでの仲代達矢さんと渡辺葉子さん

木本 憲次郎

実行委員 / 大分市

伊藤雄さんの思い出

第1章 出会い

雄さんと初めて会ったのは今から48年ほど前の当方が中学生の時であった。当時長身ですらりとした気難しそうなお兄さんが伊藤雄さんでした。当方と年齢が9歳違うため当時はギャップを感じて中々話す機会もなく会う機会が限られていたので名前も覚えてもなかったと思ふ。

大分映像センターの青木さんから、伊藤雄君は湯布院で映画の上映会(後の湯布院映画祭)を立ち上げようとしていると聞いてなおさら積極的に話すことは出来なく当時はいわゆる雲の上の存在みたいな方でした。

第2章 湯布院映画祭の実行委員としての初参加

高校3年に渡辺太志君が学校内に映画研究会を立ち上げ当方も参加をした。その活動の中で8月に湯布院である湯布院映画祭に実行委員として参加するという目標があり、面白



↑ 1978年大分映像センター(青木ビル)にて

そうだったのが初めて湯布院映画祭の実行委員として参加をした。

当時の役割はパンフレット作りだが、少し遊び心が湧いてしまって、当時大好きだった『サインはV』に出演していた岡田可愛と好きだったマンモス鈴木を映画出演者のクレジットに無理やり入れてしまった。

伊藤雄さんからは「何でこの名前入ってるの?」と製本完了後に田井さんを通じてクレームみたいなことを言われたようだが、この時に名前を憶えられてしまったと思う。

第3章 再び実行委員として

高校卒業後に大分を離れていたため第30回の『やわらかい生活』と『ヨコハマメリー』の時まで湯布院映画祭はご無沙汰でしたが今度は湯布院映画祭を観客として楽しんだ。

27年ぶりに昔から知っている人が結構何人も実行委員として頑張っているではないか。そんな折、観客席の近くでカメラを回していた現実行委員の鹿子島正彦さんから実行委員しない?と声をかけられましたが即答は出来ませんでした。

それから約2年、会社も数年前に退職し自営業でケーブルテレビの代理店をしていてフリーの状態になっていたのを契機として再び実行委員として戻る決意をした。

事務所である大分映像センターは昔の青木ビルではなく、よしとみビルの2階に転居していた。第32回、大映京都撮影所特集回の最初から活動し始めたが顔合わせはやはり緊張した。見慣れた顔が多いとはいえ会合参加者は十数人いたから、そんな時に雄さんはパソコンの調子が悪いのでちよつと見てくれとあまり居場所の無い当方に気を使ってくれた。会合を開いている同じ部屋の片隅にパソコンは置いていたが皆の顔を覚えるのは今後の課題として今現在の問題を振ってくれ

た。結果、パソコンの処理能力向上が必要と判断し報告すると、「こやかな顔で応対してくれた。第32回の打ち上げに参加し雄さんから「お帰り、ありがと、うれしかったよ」と片言でいたが声をかけられたのが未だに忘れられない。いつも宴の真ん中にいた雄さんがトイレなどで席を外し席に戻る途中で突然声をかけられたのでビックリ!! これが雄さんと飲んだ最初でした。

第4章 実行委員長勇退

それから数年後に湯布院映画祭が大赤字になった回があり、赤字は実行委員長の雄さんが全額立替えているという話を聞いてびっくりしたものだ。話しはそれで終わらず責任を取って実行委員長を勇退するという話に進んでしまふ二度目のびっくりであった。この数年赤字で新たな人材も集められずに責任を感じているというような発言だったと思う。その話を「湯布院映画祭から離れる」と思っていた他の人たちは大慌てで、雄さんの実行委員長としての役割とか仕事を洗い出して誰が分担するかという話をしていたら、

雄さん本人から「湯布院映画祭は離れない。実行委員長を辞めるだけだ」という話があり、体制上は第36回で実行委員長を勇退し第39回からは顧問として湯布院映画祭を永く支えてくれた。勇退の直前の第35回はNHK大分放送局の番組「ししまるTV」が湯布院映画祭を取材しその番組が当初は九州限定で放送され、次に日本全国、さらには海外日本語放送と拡大放送され、この頃から日本で最も古い映画祭として知られるようになったが実行委員長として何らかの手を打つと言っていた雄さんは見事に開花させたと言っても過言ではない。実際に放送後の第36回から観客数や全日パス発行数が伸びておりこの取材を受けたことは成功だったと言える。

顧問としても広告取りや湯布院へ出かけて各方面との様々な調整や顔つなぎを積極的に行ってくれ実行委員長の時より忙しそうだった。

第5章 事務局の移転

当方が実行委員として溶け込んできた時に会計という重い仕事を任せられることになった。その時に、ある程度好きに運営してくれてよい。お金の管理(出し入れ)だけキッチンと報告してくれば、と助言してくれたのが雄さんでした。

実際に会計の自身を吟味してみると意外と湯布院映画祭の事務局を兼務している大分映像センターの維持費が高くて、当時の実行委員や参加者からだけの寄付などでは今後赤字が拡大し湯布院映画祭の開催もままならない、足元の不安を解消すべきだと意見をし、実行委員会へ事務局の安価な物件への移転の可否を進言した。当時の映像センターはトキハ会館のすぐ裏ですごく便利な場所だったが、家賃「杉」を話し合っ

て無理なく払える物件に移転したほうが賢明と思えたからだ。これは会計としての大きな仕事だと思った。

10数名の実行委員は移転派と現状維持派にほぼ半分に分かれたが移転の作業は移転の時だけ大変、間取りも広くなるので頑張っ

第6章 退職して

勤務していた大分合同新聞社を退職して生活環境が一変して大変だったと思うが、映画館通いを続ける中で昼間はほぼ誰も居ない大分映像センターに常駐するようになった。

屋間に映像センターに顔を出して作業をすることが多い



←第33回湯布院映画祭終了翌日のゲストと一緒に集合写真

当方にとって昼間にほぼ常駐者としてさまざまな仕事をこなす雄さんは作業をする上でのアドバイスもたくさんいただいたが、その中で知ったのは麻雀が好きということでありその時までその事は全く知らなかった。

また雄さんのメールアドレスには1103が入っていたので以前から少し気になっていて、雄さんの誕生日が1103ではないことを知っていたので誰かの誕生日?とか記念日ですか?と聞いたら、木本君よく見てよ、いとうさんと読めるだろ1103はと笑って答えてくれた。なるほど! そう言うことねと納得したものだ。

最後に

雄さんの訃報の一報を聞いたのは1月14日午後、後に岡本さんからの電話だった。ウソ!!と何回も電話で言った記憶があるが居てもたつても居られずに大分映像センターに向かった。そしてそこに丸尾茂樹さんからの電話があり本当だったと確信した。心が落ち着かない!! どうしようと思っただ次に仲間への訃報連絡をしていた。

翌日に正式に訃報連絡のメールが湯布院映画祭から来たが家族葬で行うということで通夜と葬儀は残念ながら遠慮した。

映画、お酒、麻雀を楽しんで老後のお楽しみはこれからだと思われる時期にあのような形で急逝した雄さん無念だったでしょう。当方の人生にも影響があった雄さんは一生忘れない存在で

す。ありがたいとございました。少し時間がかかるかもしれないが皆そちらに行くからね。それまでは寂しいかもしれないが酒や映画を楽しんでください。四人揃ったらまたそちらでも麻雀をしましょう。

藤原 奈緒

参加者／臼杵市

私と伊藤雄さん

皆さんのように「雄さん」と一度は言ってみたくはなかったけれど言えないままだったので、「私と伊藤雄さん」のことを書くことと思います。

私の本屋(書店勤務です)の、文庫売り場の並びをずっと行ったところ、一際雑然とした私の作業スペースに立って、くるっと斜め後ろを見ると、郷土本コーナーがあつて、その一番目立つところに、伊藤雄さんの本が面に置いて置いてあります。「観るか 呑むか 湯布院映画祭狂譚」です。その本を見るたび、もしくは、本屋の前の国道沿いを歩くと、確かにこの場所について、別れ際に、先に家路につく私に向かつて手を振って微笑んでくれた、あの大きな姿と、声を思い出します。

コロナ禍になる前、臼杵に住み始めて1年も経たない頃だったか、突然連絡を頂いて、徳永純二さんと奥様と一緒に食事会をしましょうという話になったのです。臼杵の道で、伊藤さんに手を振った思い出は、そんな経緯でした。臼杵の美味しいご飯を食べ、お酒を飲んで、初めてお会いしたご夫婦はとても素敵な方で、曾根中生

監督の臼杵での話など、いろんな話をお聞きして、とにかく幸せな時間を過ごしたのでした。大分でも駅前の「青年酒場」などに連れていってもらうなど、伊藤さんや、映画祭の皆さんとの美味しくて楽しいお酒の時間は、書いている今でも思い出して頬が緩みます。

第40回湯布院映画祭



↑第40回(2015年)パーティで下田逸郎さんと雄さん

メイム・プレス連載をいつも読んでいて何かにつけて褒めてくれたこと(それがまたいつも具体的に絶妙なのです)。何年前か、何かの機会があり、ネット記事で柄本明さんや奥田瑛二さんについて書いた時に、すぐに気づいて「嬉しい」とメールをくれたこと。「また臼杵で飲みましょう。本の発売を記念して祝賀会を、なんて」と、最後に映画祭で会った時、言ってくださっていたこと。

「コロナ禍ですっかり出不精になってしまった私は、もう2年、飲みに出ることがほとんどなくなって、いつかいつかと楽しみに思っていたら、こんなことになってしまった。会える時に会いたい人には会わなければならぬものですね。それもまた、伊藤さんと出会って、お別れして(実感がわきませんが)学んだことです。寂しい。

本当に、ありがたいとございました。

渡辺 武信

ゲスト・映画祭、インフレット執筆者／東京都

伊藤雄追悼

——映画への愛に満ちた人生

雄さんこと伊藤雄は、1976年以来、昨2021年に第46回を迎えた湯布院映画祭を支え続けた支柱だった。急逝は惜しみて余りあるが、彼は映画愛で満たされた人生を全うして去ったのだ、と思いたい。

私が初めて湯布院映画祭に参加したのは1977年の第2回だが、その時はゲストとしてのお招きが亀の井別荘の女将、中谷明美さん経由だったためもあり、ゲスト接遇では初代実行委員長の健太郎さんが前景にあつて、次いで薫平さん、康二さんを加えた観光協会トリオの言動が目立った。伊藤雄さんはもちろん映画祭の創設にも関わったコアな実行委員だったが、彼との初対面の印象は淡い。しかし映画祭が始まってからの或る事件で私は雄さんに助けられることになる。

雄さんが「観るか 呑むか」に記している第二回映画祭の藤竜也と町の酔漢の事件は、実は私の発言がきっかけで起こったのだ。(その酔漢は健太郎さんの知人で悪気はなかったらしいから詳しくは書かないが…)、場所は庄屋の囲炉裏端だったと思う。藤さんを囲んで数人が歓談中、酔漢が入り込んで『愛のコーリダ』に関して藤さんにつっこく問いただし、性的な方向に話題を持っていくので、私が酔漢に「そういう話は映画に関係ないし、藤さんに失礼だろう」とたしなめたら、

「この野郎！ブン殴ってやる！表へ出る」となったのだ。「ここで格好いいのは藤さんで、「渡辺さんは俺のために言ってくれてるんだ。だからお前の相手は俺がする！」と立ち上がったのである。あと雄さんが書いているとりの流れで、藤さんを待避させて雄さんが殴られたふりをしてわざと池に落ちるといふ芝居をしてくれたのだった。これはゲストの映画スターを守るためだが、とは言え救護対象には私も入っていたわけである。私はこの池の端の騒動を遠目に見ていたのだが、後から雄さんに細部の状況を聞き、感謝すると同時に実行委員の核だったにしてまだまだ若い二十代こそこの伊藤雄の才気と危機処理能力と快気わくきに感じ入って、親近感を抱いた。

それ以来、映画祭に通い続け、数回後からは家族(妻と息子たち)も同行するようになった。息子の信也、哲也は幼い頃から実行委員の末席に連なり、公民館ロビーの販売係からシンポジウムのマイク受け渡し係などを経て、シンポジウムの司会も務めるようになった。彼らは多くの実行委員に兄弟のように接してもらい、わけても長く委員長を務めた雄さんには、叱られ、励まされ、可愛がられつつ大人になって行った。つまり彼らは通常の「学齢集団」ではなく、「異年齢集団」という現代では得にくい環境に恵まれたわけで、それゆえに実行委員の諸氏諸嬢への親近感濃密だったし、中でも特に、この集団の父性を背負った雄さんへの思慕は深く、訃報に接したときの彼らの悲哀は深かった。

私は湯布院通いが重なるうちに、雄さんとも親しく話すようになり、初めはその年の上映作品を論じ合ったが、次第に私的な会話の中で将来の上映作品についても相談を受けるようになった。自身も映画マニアである雄さんの私についてのイメージは、他のことはともかく日活アクション映

画に詳しい人「らしく(これは間違いではないが)、或る年日活を特集したいが、あまり知られていない傑作はないだろうか」と問われた。その時に私が推したのは裕次郎でも旭でもないためファンにも知られる機会が少ない『狼の王子』(高橋英樹、浅丘ルリ子主演)だった。雄さんはそれをビデオか何かで観て感動し(確か「凄い映画でした」というような感想が伝わってきた)、その結果、同作の上映が2008年の第33回に実現した。ゲストとして監督の舛田利雄が招かれ、『完全な遊戯』『赤いハンカチ』『地獄の破門状』などなどの舛田利雄傑作集が上映される運びになり、私は映画祭の企画の片隅を担った嬉しさもあったが、それ以上に一観客としても楽しんだ。ゲストの舛田さんが私と雄さんの前で生ビールに焼酎をドボドボ注いで飲み干しつつ、日活アクションに関するさまざまな逸話をご機嫌で語ってくれたことも含めて、この年のことは雄さんとの数多くの思い出の中でも特に忘れられない。



↑第33回(2008年)左から、村川透監督、舛田利雄監督、渡辺武信さん

安宅 玲奈

実行委員／東京都

雄さんとの思い出

雄さんとの初めての出会いから7年。これほど時間が経っていることに驚きを感じながら、この7年間の思い出を振り返り、ここに記そうと思います。

今回この素敵なアイデアに参加するにあたり改めて雄さんのことを思い返してみても一番印象的なことは、雄さんの多彩な表情でした。

初めのころはムスツとした表情が多いように感じ、何か怒っているのかとヒヤヒヤしたこともありましたが、しかし、交流をしていくうちに表情の豊かに気づきました。

ある時、映画祭本部でホワイトボードの予定表を真剣な顔で凝視しており、何か不備やトラブルもあったのかと聞いたことがありました。

返事は「タコ飯を何時に食べようか悩んでた」こんなコントのようなやり取りがいくつもあり、大抵真剣な顔で黙っている時は何か別のことを考えていたり、ポーズとしていたり、そのまま寝たりするのでした。

雄さんは私の大学卒業後も、お仕事の合間をぬって飲みに誘ってくれたり、映画祭以外でも何かと気にかけてもらい、面倒見の良い親戚のおじさんのようなとても心地のよさを本当に勝手ながらに感じていました。

もうあの素敵な笑顔や、美味しそうにご飯とお酒を楽しむ雄さんを見れないのは、とても寂しく悲しいことですが、私の思い出の中の雄さんはいつも笑っていたので、私も笑顔で見送ろうと思

ます。
いつかこのご時世が落ち着いた時、みんなで楽しく雄さんのお話ができる日を心から願っています！

稲葉 亜希子

元実行委員／大分市

雄さんへ

あの日新聞で訃報を見た時、信じられなくて。何度も何度も読んで、本当に事実なのか誰かに聞きたくて。

でも二〇年以上顔を出していない映画祭事務局へ電話する勇氣はなく、新聞から切り取ってまた何度も読んで、今年来た年賀状を確認した。毎年恒例の前年の映画ベストテンと雄さんの字で一言が書いてあるのを見て、これは突然のことだったのかな、と思った。

私が湯布院映画祭の実行委員として在籍していたのは第一八回から第二〇回までのわずかな間だった。

実行委員になったばかりの友人が海外へ行くことになり、代りに参加することになった。その友人が最初の挨拶の時に「映画祭をお手伝いできたらと思っています」みたいなことを言ったら某実行委員から「手伝うとかそんな考えの人はいらない」的なことを言われたと聞いた。

その発言をした某実行委員は、たぶん雄さんじゃないかなと思っていて、私の自己紹介の時はかなり言葉に気を付けて印象を少しでも良くしようとした記憶がある。

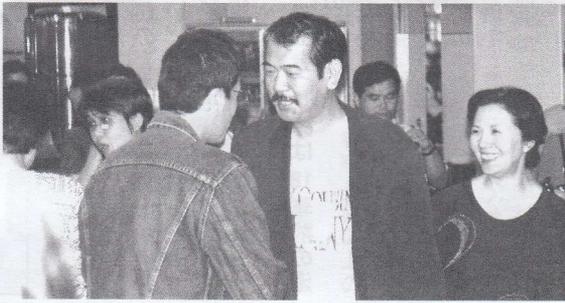
今まで雄さんと自分の年の差がどのくらい離れているかは気づいたこともなく記事を見るまで年齢を知らなかった。私が二十七歳で実行委員を始めた時、雄さんは四〇歳過ぎたくらいだったと知り驚いた。私の見た雄さんは優しく、大きな声で怒ったりすることもなかった、いつも冷静だったし落ち着いて私たちを導いてくれた。年下の私たちもみんな「伊藤さん」でなく「雄さん」と呼び、小さな目がかわいらしく、少年のようにピアノなどところがあつて人を引き付ける魅力的な方だった。

お酒が大好きだった雄さんはいよいよお店にも詳しく、その時の話はいつも映画の話だった。見た映画のこと、映画を作る人たちのこと……ただ私は映画が好き

だったけど、観る本数も少ないし内容はあまり覚えてないこともあつて相槌もとんちんかんだったと思う。多分雄さんは物足りなかったかな。

私が実行委員を辞めた後もずっと変わらず雄さんの映画を愛する気持ちは続いていて、二五年も、すい！
本当に映画が大好きな雄さんは私にとつては生涯湯布院映画祭の実行委員長。

たまには顔を出してと年賀状に書いてくれていたのに、とうとう二五年間会わないままだった。雄さん、いっしょに飲みたかったよ、いつかそん今の映画界のこと聞きたかったよ、いつかそん



↑第21回(1996年)奥田瑛二さん(後ろ姿)と雄さん

な機会があるって思ってたのんびりしていたよ。本当に寂しいです。

今年の年賀状に本を買って来てあげたのがとうつであつたけど、みなさんに書いていたのかな。

私：まだ雄さんの本は買ってないです、ごめんなさい。でも勘違いして書いていたならよかつたかな。

じゃあね、雄さん

草場 尚也

元実行委員／東京都

伊藤雄さんへ

雄さんが亡くなる1週間前、電話越しではあるが、話をする機会を得た。

拙作がシネマ5で公開できることになり、直接ご報告したかったのだ。

雄さんには作品への応援コメントを頂いていたので改めて感謝を伝えつつ、上映の日程に合わせて観に行くつもりだよ、と暖かいお言葉も頂けた。

だからこそ、訃報を聞いたときは、信じられない気持ちでいっぱいだった。

雄さんは実行委員としての暦が浅かった私にも、よく東京での飲み会に誘ってくれたり、その包容力にいつも惹かれていた。

一緒に飲むお酒はずっと美味しかった。

雄さんの元へ届くくらい、もっともつと面白い映画を作つて、喜んでもらえたらいいな。

大切なコメントを胸に刻み、これからも精進します！

田村 令

実行委員／東京都

雄さんから受けた影響

雄さんというおっちゃんはその僕を対等に扱い、受付機に軟禁されている僕を解放して映画を観せてくれた。それから十年近く毎年湯布院に通っている。上下関係や仕事に気配り損しがちな僕はここで変わった。

映画を立見して仕事して寝不足になって映画を立見する。こうして映画館で観るといふ行為に恋をした。寝てしまふこともある。難解で頭が爆発することもある。ただお家で観ると後ろめたい。

ほんのちよっぴりの言葉が大きく人を愛えてくれた。雄さんに「お前さん」と言われるのが好きって人。いっぱいいると思いません。

また映画の話しましょう。たくさん観ておきます。



↑第5回(1980年)森下愛子さんと雄さん

二宮 謙児

実行委員／由布市

雄さんと私の18年

亡くなった後も生前の姿をありありと思いだされる人はそういない。その声、その話し方、その立ち姿。今、雄さんを知る誰もが皆同じ気持ちだと思ふ。

私が雄さんと初めて出会ったのは18年前の湯布院映画祭第29回の年だった。

湯布院映画祭の実行委員は、皆本業以外の活動としてボランティアで携わっている。いわば社会人の「部活」のような立ち位置だけど、雄さんは湯布院町の中の湯平から実行委員として参加した私を何かと気にかけてくれ、前職の金融機関勤務の時代は仕事面でも助けてくれたこともあった。

私が勤めていた会社を早期退職した7年前、その年の特別上映作品となる『この国の空』の初号を東映東京撮影所の試写室で雄さんと一緒に観る機会があった。

映画祭の関係で何度も上京している雄さんと違つて、東映撮影所はおろか、東京でさえも数えるほどしか来たことのない普通の元会社員の私を、撮影所の映画関係者に丁寧に紹介してくれたことを今でも有難く思い出す。

その後、家業の旅館業に専念することとなったため、なかなか大分市内の映像センターに立ち寄る機会も少なくなつてしまつたけど、久しぶりに会つても「湯平どう？」といつものように気さくに声を掛けてくれた。

昨年、第46回映画祭から新会場となった「ゆふいんラックホール」のロビーで、雄さんが書いた映画祭の本「観るか、呑むか」を前にして、たまたまちよつと前に旅館の本を出したところのある私に、「二宮さんも経験済みだと思ふけど…、本は書くのも大変だけど、売るのはもっと大変だね。」と笑いながら話していたのが最後の会話だった。

いつも穏やかで、丁寧で、人一倍気を遣う。そんな雄さんの魅力に引き寄せられるように集まつた多くの映画人・ボランティアに支えられながら46年続いた湯布院映画祭。

雄さんの人柄は関わつた全ての人々の心に生き、その魂はきつとこれからも雄さんが大好きだつた湯布院映画祭を支えて行くことだろう。ありがとう雄さん。

前田 有佳里

実行委員／大分市

雄さんとの思い出

雄さんと出会つてまる2年でした。

実行委員として初めて関わらせて頂いた2020年、映画祭の準備から本番まで経験させて頂いて私が一番心に思ったことは、「こんな映画祭を、「映画が好きだ」という一心で約半世紀に渡つて、ほぼボランティアで積み上げて来た方達に対する敬意でした。それと同時に、そんな、仕事とも家庭とも違うライフワークを持つて生きる人生に、自分の理想を見つけた気がしました。

昨年の準備期間中、仕事の合間に顔を出した

事務局で、「お疲れ。俺も若い頃はよく仕事抜け出して、「この仕事をしに来てたな。」と、ぼそと懐かしそうに嬉しそうに話してくれた雄さんを忘れられませぬ。

昨年2021年末、映画祭の打ち上げでお会いしたのが最期となってしまいました。

その翌日お送りしたお礼メールに、返信してくださった雄さんのメールが、私のスマホに残っています。

「やはり若い人や新人が加わると盛り上がって楽しいですね。湯布院打ち上げも愉しさ必見です！ 来年もよろしく😊🍷」

雄さん。

雄さん亡き後の実行委員の集まりは、少し寂しさと不安が入り混じった時間ではありませんでしたが、そんな中でも今年の映画祭開催に向けて、前向きな熱い意見交換がなされ、みんな今年の成功に向けて頑張っています。ぜひ見守っててくださいね。

溝口直

大分古い映画を愛する会会長／大分市

伊藤雄さんへ

人の死や四日の朝も受け入れず
人の死や立ち直れずに今日五日

直 直

雄ちゃんの死はショックだった。え？ あの雄

ちゃん？ ウツソオ

すべて思い出すのは、元気な雄ちゃん、タバコくわえた雄ちゃん。

死んだというイメージが浮かばない。うそでしょ、ウツソオ。

ウツソオ……と言いつけるあいだにも、だんだん現実の、ウソでない、ほんとうらしい雄ちゃん像が現れてくる。

心臓マヒ、一瞬。ヨカッタなど言いたくもないが、九十歳近い自分にとっては、死は目前、どうやったらそれができるか？ 自分にとってはいつも問題なのに、雄ちゃんはやすやすとそれを実行した…。

60年前、僕がひとりで京都医大から帰って来た時、僕と同じ映画好きをどれほど探したことか。

一人で、「好きもの」がいそうな痕跡を探していた時、中央町の電柱に張られていたルイ・マルの『鬼火』の手書きのチラシの張り紙を見つけて、これで確信を得た。そしてほどならず、雄ちゃん、田井さん、三ちゃんの高専三人組と出合ったのだ。果たして、雄ちゃん三人組の映画好き度は一方ならぬものがあった。三人は、

既に、湯布院映画祭を立ち上げ、果敢にも映画館一つない町の映画祭を売りに、大分魂一本にユニークな企画でめざらしい、どこにもないアイデアの映画祭を今でも続けて、もう50回目も目前だ。その「好き度」は尋常



↑ 溝口直先生と雄さん

一様ではない。

良かったのは、この映画祭の歴史を書いた伊藤雄著の「観るか呑むか」が出版されたところだったことだ。映画祭の歴史が、雄さんの事を含めて楽しそうに書かれている。実は、私も、映画は第一封切で観たいと思いい（大分はその頃、二、三番館だった）、映画を早く見るためには、どこでもいい、都会がいいと、都会の大学をねらった。しかし、大分の雄ちゃんは、「観るか呑むか」による、いい映画を見るために、広島、四国方面まで出かけたと書いてある。ほう、その手もあったかと、つくづく共感した。映画好きはいろんなことを思いつくものだ。そして、その情熱は湯布院映画祭で実を結んだ。映画祭は全国から観客が集まり、プロの映画人と交流の場となっている。凄いアイデアだ。素晴らしい企画だ。そして多くの映画祭が中止された今でも、一番早く始めたこの湯布院映画祭は最長記録を維持している。

その雄ちゃんが、心臓発作で亡くなった。残念だったろう。心残りだったろう。だが、雄ちゃん、心配要らない。あとは残りの映画好きたちが頑張るだろうよ。雄ちゃん、苦しまなくてよかったね。安らかに昇って行ってね。僕ももう直ぐ後を追って行くからね。

後藤(旧姓 安部) 愛理

元実行委員／大分県玖珠郡

雄さんの思い出

雄さんには私が芸短に通っている頃からお世話になりました。

作品選定会議が終わると青年酒場やサッテージャワに連れて行ってくれて、「馳走してくれました。雄さんはいつもお酒を飲みながら、いろいろお話を聞かせてくれました。映画の話や映画祭の話、スタッフのことや由布院の方の話など。ときどき、奥さんやお子さんのことも話していました。(奥さんと出会う)たきかけは映画祭と言っていた気が……)

映画や映画祭の話をする雄さんはお酒を飲んでいられるにも関わらず目がキラキラしていて楽しんで、まるで少年のようだなあと密かに思っていました。

私は「こころ」5年映画祭に参加しておらず、そろそろまた顔を出したいなと考えていたのですが、「こんなに唐突に会えなくなるなんて思ってもいませんでした。」

つづらな瞳をキラキラさせながら映画や映画祭を語っていた雄さん。大好きです。ずっと、ずっと忘れません。

渡辺 信也

実行委員／東京都

伊藤雄さんとの思い出

僕ら渡辺家は、父・武信が湯布院映画祭にゲストとしてお招き頂いたことから、40年以上もの長き間、雄さんをはじめとする実行委員の皆さま、常連の参加者の皆さん、映画関係者の方々に大変お世話になってきました。毎年夏を湯布院で過ごすことが家族にとって何よりの楽しみで、東京生まれである僕と弟の哲也にとっ

て、映画祭は「心の故郷」でもあります。

10代の頃、雄さんにお声がけ頂き、映画祭の実行委員にして頂いたことは、僕ら兄弟の人生を変えたと言っても過言ではありません。日本中から映画好きが集う特別な場所、如何わしいけれど魅力的な映画人を目の当たりにし、シンポジウムの司会をやらせて頂いたり、パーティーでお酒を飲んだり、学生には分不相応な経験を沢山させて頂きました。その尊い時間が僕らの人格形成に大きく影響し、今の仕事にも繋がっています。

僕は今東京で映画の仕事をしています。湯布院の知名度・ブランド力は素晴らしく、多くの映画関係者が「いつか行ってみたい映画祭」湯布院といえは伊藤雄さん」とよく口にされます。幼い頃は身近過ぎてよく分かってなかったのですが、今、映画業界でそういう言葉を耳にすると、雄さんが長きに渡って湯布院と映画界を繋いできたことが実感出来て、なんだか誇らしい気持ちになります。

一回だけ僕が映画祭に貢献出来たかなと思いつくのは、第36回(2011年)に俳優の豊川悦司さんをゲストとしてお招きした時で、所属事務所と近い関係だったのでコーディネートさせて頂きました。スケジュールや上映作品の調整が結構大変で、映画祭と事務所の間に入って何度もやり取りした後で成立したのですが、全部



↑ 第10回(1985年)左から、雄さん、武信さん、信也君

終わった後のパーティーの席で、雄さんがいつもの笑顔で「信也お疲れさま、ありがと」と言ってくれたのが嬉しくて記憶に残っています。そんなちよつとした一言で人の心を掴む、人徳がある方でした。

突然のご逝去に今も心の整理がつきませんが、天国の雄さんに深く感謝しています。雄さんの旅立ちが安らかなものでありますように、心から「冥福をお祈りいたします。」

川原(旧姓 西本) 蘭子

元実行委員／東京都

雄さんの思い出

パンフレット作業が佳境の中、ほろ酔いの雄さんが映像センターに戻って来た。「差し入れがあるぞ」と手提げ紐のついた折を掲げて。

まさに「酔って帰ってくるお父さんやん!」サザエさんでしか見たことない光景にガツンときたせいか、今でも一番印象に残っている雄さんの姿。

ちなみに折の中身は焼き鳥でとっても美味しかったです。

雄さんは実行委員長でもあったけれど、「こころ」なおいさんであり、時にがんで難攻不落なプレゼン相手であり、「映画館行くと高確率で出会う人」だったり。

不思議だなあ。

親戚でも上司でも先輩でもない歳上世代の人と、あーだこーだ意見を言い合ったり、一緒に映画を観たりお酒を飲んだりしゃべったり。気づけ

ば長い時間を共有していた。目立って企画力があるわけでもなく地味な裏方作業を好む私に対しても、「実行委員の仲間」だと言ってくれた雄さん。ありがとう雄さん。仲間になれて、関わられて、私はとても楽しかった。沢山の思い出を、本当にありがとう。

野村 正昭

ゲスト・映画祭。シフレット執筆者／東京都

雄さん追悼

○雄さんと初めて会ったのは、第13回映画祭にゲストとして招かれた時だったと思う。1988年のことだから、もう30年以上も前の話になる。映画祭に参加したのも初めてで、右も左も分からず、ボーっとしていた。まだ映画祭の面白さも知らず、「こういうものか」と思っただけで、勿論、雄さんのことも認識していなかった。翌年、『天と地と』（90年）の密着取材で、国内やカナダまで同行した時、湯布院にも数日間、滞在した。近くの九重高原で撮影があったからで、「これでもう二度と湯布院に来ることはないだろうなあ」と町内を散策したりした。

○ところが、世の中はどのようなか、本当に分らない。「それから約10年後」と、映画だったら、ここで字幕が出るころだが、98年、文化記録映画祭のスタート時に、声をかけてもらったことから、現在に至るまで、何度となく湯布院に通う

とになった。有難いというか、これはもう絶句するしかありませんね。

○文化記録映画祭はもとより、98年の夏の映画祭からは、ほぼ毎回のように参加することになり、気がつけば、シンポジウムのMCまで務めていたりして、お世話になりっぱなし。雄さんとも、大分や東京で頻繁に会い、話すようになった。ただ、打ち合わせや宴会も含めて、いつも何人かと一緒にあり、雄さんと二人きりで話す機会は殆どなかったように思う。

○2015年の秋、11月半ばの夜。初台の新国立劇場に、チエーホフ「桜の園」の舞台公演を見に行った。普段、演劇など見に行く機会は滅多にないけれど、これも世間のしがらみで、ロビイにポツンと佇んでいたら、「よう」と声をかけてくれたのが、雄さんだった。ロパーヒン役で柄本佑さんが出演していて、それで見に来たんだと、雄さんは言っていた。佑さんは、湯布院映画祭の常連ゲストで、デビュー前は実行委員のメンバーだったこともあり、雄さんにとっては身内も同然の仲だった。しかし、これが試写室や劇場だったら、映画関係の知り合いに出会うこともあるだろうけれど、舞台となると、勝手がちがう。顔見知りもなく、大仰に言えば、雄さんも心細いというか、アウェイ感が強かったんだらうと思う。それは、こちらも同じで、待ち合わせをしたわけでもないのに、思いがけない場所であって、雄さんは本当に嬉しそうだった。公演が終って、近くにある小水ガイヤさんが経営する小さなお店で食事をした。かなり遅くまで、一緒に話しこんだ。でも、映画でもなく、映画祭でもなく、さつき見た舞台の話でもなく、いったい何の話をしたのか、不思議なことに、さっぱり記憶がなく、ただもう、ひどく愉しかった。それから雄さんが上京する度に連絡してもらうようになった。東京で会った時も、映画祭でも、雄さんは『桜の園』を見に行っ

たら、野村さんに会ってなあ」と周囲の人たちに、何度も何度も話していた。よっぽど嬉しかったんだらうなあ、僕もそうだったか。

○一期一会という言葉があるが、あれが僕と雄さんの一期一会だったのかも知れない。そこだけ、すぼり空白になっているが、愉しかった記憶だけが残って、その夜の弾んだ空気は、今でもはつきり思い出せる。新国立劇場には、それからオペラやバレエや演劇やコンサートを見に行ったりするが、行く度に、僕と同じように、ロビイでポツンと佇んでいた雄さんの姿を思い出す。今も「よう」と声をかけてくれそうな気がする。

○雄さんが、最後に見た映画は何だろうか？

鹿子島 正彦

実行委員／大分市

雄さんへ

雄さんとの出会いから最後までを徒然なるままに書き綴り、偲びたいと思います。

①出合いは1979年の第四回湯布院映画祭。湯布院映画祭は第一回から知っていたが、当時、私は高校3年の受験生。大分に東京から俳優さんが来るという夢のような話を新聞で知り、見に行きたかったが、行けるはずもなく、悶々と過していたら、3年後、知り合ったばかりの初代映写技師の青柳さんから「湯布院映画祭、知ってる？ 行くなら手伝って」と言われて、二つ返事で付いて行った（二代目が飯山庄之輔さん、現映

写技師の飯山庄蔵さんは息子さんで三代目。青柳さんと亀の井別荘の同部屋で寝起きし、映

写技師のお仕事なんてまるで分らないから、実行委員見習いとして、ゼロハンテープや画鋸が無ければ、近くの文房具屋に買いに走ったりしていたら、2日目に「亀の井別荘の宿泊費を2人分は払えないから、今日から、実行委員の部屋で寝泊まりして欲しい」と言われ、タコ部屋のような実行委員の部屋に移動。この会話が雄さんとの最初ではないかと思う。まだ、誰が誰かは分からなかったけど……



↑飯山庄之輔さん(左)と雄さん

②雄さんと言えば、なんととっても、広島と月光仮面とキートン。

◇広島というのは、日本プロ野球のセリーグの広島東洋カープ。雄さんは、広島カープのファン。出会った頃からカープファンというのは聞いていたけど、「巨人・大鵬・卵焼き」の時代になんて広島なんだろうというのが素朴な疑問。古参の実行委員はみな理由を知っていたのだろう話題にもあがらない。こちらは理由が分からないまま数年が過ぎたある時に判明した。小さかった頃に野球(盤だったか、カードか)のゲームをした時に、誰も広島なんて知らないし、知っていたとしてもやりたくなくて、雄さんが無理矢理広島になった、その時からのファンということ。だから、長いのである。

(ある日突然、大分映像センターに広島カープのマスケットのイラストの不気味なでっかいスリッパがあった。勿論、雄さんのだった)



◇月光仮面というのは、これは直ぐに雄さんの十八番と判明。ただし、実際にはなかなか見ることが出来ず、ある時(中谷健太郎さんと溝口薫平さんの還暦のお祝いの席だったかな。だとしたら、今から30年近く前。出会ってから13年位経っている)、興にのつた雄さんがバイクに乗る格好のアクション付きの月光仮面を歌って踊った。非常に楽しくて場は盛り上がった。その後、もう1回見たかな。



↑バイクに跨る月光「雄、仮面

◇キートンは、世界の三大喜劇王の一人で、バスター・キートンの事。みんなはチャップリンが面白くて一番と言っているのに(こう書くと雄さんに叱られるだろうな)、雄さんはキートン派。これまたなんぞと思っただけど、理由は忘れられた(三宮さんは覚えてるだろうか。今度聞こうつと)。キートンの素晴らしさは雄さんに教えてもらったようなもの。

③他には、醤油。目玉焼きでもコロッケでも、ソースではなくて醤油。これは頑固に醤油。なんでなのか理由は聞いたけど忘れました。

④出会った頃の雄さんは、男8人・女4人の疑似兄弟姉妹の長男のような存在(雄さん本人は次男ですが)。遅れて仲間に加わった私が7歳違いの末っ子。雄さんから、最初は「お前さん」と呼ばれていました。それが弟分や妹分が増えて兄弟姉妹が20数人に膨れ上がった頃(大分映像センターが青木ビルからよしとみビルに移転した頃かな)に「かごしま君」になり、いつしか兄弟姉妹もグツと減り、残ったのが4〜5人みたいな時期になって(よしとみビルから第二信用信販ビルに移転した頃かな、最近では「かごちゃん」「ごご」でも、「ごご」でもなく、その間)。この呼び方にも愛情と照れを感じていて正直微笑ましく思っていました。

⑤溝口直先生の病院の看護婦寮に卓球台があり、一度だけそこで卓球大会のようなことをしたことがあった。私は球技(部活でやっていた野球、体育の授業のサッカー、バレーボール、バスケットボール)はほぼ好きで、卓球もやっていて、シェイクハンドのカットマンだったから、卓球未経験の実行委員相手にカットが面白いように決まったけど、卓球部の雄さんには全く通じなかった。参りました。

⑥雄さんは麻雀が好きだったから、実行委員会の後、麻雀好きの実行委員とよく雀荘に行っていた。今の映像センター(兼湯布院映画祭事務局)では、毎週水曜日に集まって麻雀をやっていた。麻雀初心者(私)は参加しなかったけど、実に楽しそうだった。

⑦そういえば、映画祭期間中に実行委員の顔写真を撮り(この時がみんな生き生きして、一番良い顔をしているという理由)、翌年のポスターにしたことがあった。新人類という言葉が流行っていた頃で、そのポスターの実行委員を新人類と旧人類に分け、雄さんのところに旧人類と書き込んで、ムツとされた。20代と30代の違い位の軽い気持ちでしたが、そりゃムツとしますわな。ごめんなさい。

⑧1992年の第17回のパンフレットで『おかげ』の村田雄浩さんのコメントのお名前を間違えて掲載してしまっただ。パンフレット編集長の私が直接村田さんに謝らなければいけないのに、俳優が相手ということではビビッていたら、ゲストで来た村田さんに雄さんが真っ先に謝ってくれた。村田さんは凄く優しい人で安堵した覚えがあります。雄さん、ありがとございました。

⑨小見出し判定委員会。パンフレットの編集長時代、頂いたコメントに小見出しを付ける作業があった。それはパンフレット編集作業の終わりで、時間はなく、約50通にもなるコメントに

一両日でつけなければいけなかった。雄さんの本業は新聞社の整理部。整理部の仕事は記事のレイアウトや見出しを付ける部署。パンフレットのコメントの小見出しを付けてもらった。ある年、新人実行委員のW田嬢にも小見出しを付けてもらったら、どうもこちらの方が面白く感じ、雄さんの小見出しはプロらしく硬い印象だった。編集部員のN畑とその他の数人で、「小見出し判定会議」と称して裏組織を作り、コメントの小見出しの判定をしたことが何年かあった。殆ど、W田嬢の方を採用した。そんな事が数年続いた後に雄さんが「これ、俺の付けた小見出しじゃない！」と気付いた。そして、小見出し判定会議は解散した。

⑩「観るか呑むか」が出来た時、「雄さんの文章は、体言止めなんだ」と編集の小林さんから言われて、文章の修正を提案されたそう。俺、新聞連載の時に、そんなこと言われた事ないけど、黙って言う事を聞いて修正した」と言っていた。雄さん、それ、私がパンフレットの作品解説の責任者として修正を頼んだ時に、「俺、新聞連載で、そんなこと言われた事ないって言ったじゃん。忘れたのかな。」

⑪お酒が大好きだが、決して無理強いはせず、声を荒げることもなく、暴力からは程遠く、年下の者の失敗はカバールし、責任感は一・倍強く、いつも優しく力持ち。まるで理想の上司ではないですか。そうか、私は、雄さんを目標に社会人をしてきたんだ。足元にも及ばないけど。

⑫1月12日(水)午後7時頃。仕事が終わって、メイムのE藤くんの手書き原稿を大分映像センターに受け取りに行ったら、いつものように、いつもの席に雄さんは居た。コロナが怖いので、ちょっと会釈をして原稿を持ち帰った。いつもの光景だったから、なんの感慨もないけれど、それが、雄さんとの最後。通夜も葬儀も行っていないから、それがいまだに喉に焼き付いている。忘れられない。だから、私の中では雄さんは今まで通り

に変わらず生きています。これからも。

⑬最後の言葉

湯布院町の居酒屋 龍庵のカウンターで、
「雄さん、車が来ましたよ。帰りますよ」と声を掛けられ、

帽子を被り、マフラーを巻き、シヨルダーバッグを肩に掛け、右手を軽く上げ、

「おつ、帰るよ。お疲れさん」

と言っている、いつものように楽しくお酒を飲んで、仲間と楽しく過ごしたと思える一場面を切り取った写真。まるで映画のラストシーンのよう。2022年1月13日(木)、壁時計の針は午後11時20分。亡くなる10数分前の最期の写真。

後藤 睦文

元実行委員 / 由布市

雄さんと僕

雄さんを知ったのは、勿論、湯布院映画祭でした。第4回特別試写作品の『月山』をなぜか見に行った際、この方が実行委員長をされているんだと。

当時、僕は高校生でした。

その後は、ゆふいん映画愛好会の活動を通じて、一時期は映画祭の実行委員にもなり、大分良い映画を見る会の定期上映会にも愛好会の仲間と一緒に通うようになり、雄さんの常に精力的なその上映活動ぶりに、映画を敬愛するパッションを感じていました。

その後、愛好会の活動がゆふいんでも映画祭の活動にシフトして以降は、湯布院の三つの映画祭(もう一つが、ゆふいん文化・記録映画祭)の関係者同士となり、勿論、湯布院映画祭にも通っていました。

恒例ベストテンの拝見や直接の会話で、映画の趣味は正直あまり合わなかったような気もしますが、湯布院映画祭を継続してゆこうとする力というか、熱情はお年を重ねても不変でした。

そのうち、私は職場(地元の役所、湯布院振興局)的にも、湯布院映画祭を支援すべき立場となり、雄さんは報告、連絡、相談に足繁く通ってくれました。

昨年度末に湯布院公民館が建て替わり、通称ラックホールという湯布院地域複合施設となっても、本当に労を厭わず、「雄さん、わざわざ来館されずとも、電話一本でもいいですよ」と伝えても、変わらなかった。

そんなに湯布院に足を運ぶことで、顔なじみになった方々の数は、私なんかの知っている観光関係者各位の比では無いです。

これは、本当に雄さんの人脈、人徳ですね。映画人との永年の交流とは、別の。

大分合同新聞社完全退職後は、サンデー毎日となられた故か、ホントによく大分シネマ5で出くわしました。

雄さんの定席は、前から2列目の、スクリーンに向かって左から2番目……。

最後の夜は、私たち東勝吉2021プロジェクトの食事会に合流されるとの連絡入り、ノンアルコールだった僕は車を置きに自宅へ戻りました。

雄さんとは、本当に久方ぶりにお酒を呑みました。

深夜、一同車で帰途に就き、雄さんの常宿の駐車場へ一旦下車。

「雄さん、玄関まで送りましょう。」
「お前サン以上に、勝手知ったる敷地内やけん。」

「近道しないでくださいよ。」
「うん。分かった。」
それが、最期でした。

寒の入り、玄関先までお見送りせず、本当に申し訳なく思います。

雄さん、「免なさい…。」

合掌

三宮 康裕

四代目実行委員長／大分市

無類の映画好き人好き

雄さんとは、五十年近くの付き合いになり、思えばあまりにも多いので最近のことを記したいと思います。

二〇一、二年、映画祭の事務所雄さんと二人になることがあっても、お互い映画祭の今後について話すことは少なかったような気がする。そう長くは続けられないことはお互い分かっているが、口に出してしまうと、現実的に進めないといけなくなるので、わざと避けていたのだと思う。「湯布院映画祭こそ我が人生」と言って憚らない雄さんだから、映画祭がない生活を想像出来なかったのだと思う。だから、計報に接した時、雄さんは自分で映画祭を辞める決断をしたくなかったんだろう、とさえ思った。

映画を愛し、映画祭を愛し、酒を愛し、に加えて、映画を愛する人を愛し、映画祭を愛して

る人を愛し、が雄さんには付け加わっていた。映画を愛する人と出会い、繋がっていたい、映画祭を愛する人とめぐり逢いたい、という無類の人好きの雄さんの周りには、いつも人の輪があった。輪の中に入るのには簡単だが、なかなか抜け出せない、雄マジックが張り巡らされている、そんな輪だったと思う。

昨年7月頃、著書「観るか呑むか」の出版と、古希のお祝いをやろう、と話を向けたが、コロナの影響で、映画祭が夏に開催できるかどうか微妙な時期だったので、映画祭が終わってからでいい、と雄さんに言われたが、映画祭が秋に延期になり、後始末で年を越してしまい、結局お祝いができないままだったのが、何とも心残りである。

亡くなった日の夜、警察での検視と遺留品の引き渡しが終わわり、事務所に戻って、集まったメンバーに報告をした時、これ以上悲しむのは辛いので、「ちよっと飲みすぎた、ゴメン、ゴメンと今にも起きてきそうだった」などと話していると、著書の書店用のポップを飾るために雄さんが自分で準備していた色紙が突然棚から落ちてきた。今まで、怒声や罵声を聞いたことがない雄さんが怒った、と一同震え上がった。

もう、今年の映画祭の準備を始めているが、何とか無事に開催できるよう、みんなで分担してやっている。今までのようにうまくいかなかったも、雄さん、怒らないで下さい。何せ、私たちは、伊藤雄がいらない映画祭をやっているのだから。



↑ 1983年10月5日(水) 銀座アスタ新宿迎賓館にて



In Memory of 雄さん